韓日発掘交流に参加して

奈良文化財研究所との研究交流の一環として、2014年9月16日から11月7日まで奈文研に滞在し、藤原宮跡と平城京興福寺の発掘調査に参加しました。

藤原宮跡の発掘調査は大極殿南側の内庭でおこなわれ、調査の結果、建物、運河、先行条坊道路、古墳等が確認されました。奈文研では、韓国国立慶州文化財研究所と異なり、発掘の面積を小規模に分けて調査をおこなっており、また、考古学や建築史学、文献史学等の様々な専攻の研究員が一つのチームになって、遺構や遺物について多角的に検討をおこなっている点が、建築を専攻する者として羨ましく感じました。

続いて参加した興福寺の発掘調査は、伽藍整備と防災施設建設のための事前調査が並行しておこなわれていました。今回の発掘調査は西室や北円堂、五重塔周辺で進められ、北円堂では回廊と推定される基壇の痕跡と近世以降と推定される土坑や瓦溜りが確認されました。五重塔の調査では明治時代と推定される土管が完全な状態で確認されました。

このほかに薬師寺東塔修理・発掘現場、三河国分尼寺整備状況、足助の歴史的な町並み、博物館明治村の見学や奈文研のGIS（地理情報システム）や遺跡整備を専門とする研究員との懇談等を通じて、日本の過去・現在・未来の文化財の整備方法について、多くのことを学ぶことができ、非常に意義深い交流となりました。

国立慶州文化財研究所と奈文研の韓日発掘交流は来年で10年になります。今後も両国の研究所がさらに良好な関係を維持し、研究者間の学術交流がより一層深まることを期待しています。

（国立慶州文化財研究所　金 東烈、翻訳　諫早 直人）

興福寺での測量風景（左奥が筆者）

遺跡整備に関する研究集会

遺跡整備研究室では、これまで遺跡整備の実務に携わる行政担当者・研究者等を対象とする研究集会を実施してきました。今年度は、2015年1月16日に開催し、参加者は85名でした。

遺跡の環境整備事業は、昭和40年代から始まり、その当初に整備された遺跡では、経年により施設の劣化・陳腐化が進んだり、遺構の保存上の問題が生じたりして、再整備を実施・計画している事例が増えています。そこで、今年度の研究集会では、「史跡等の整備・活用の長期的な展開　―経年によるソフト・ハードの変化と再生―」をテーマとし、前半に、長期に渡り整備を実施している3つの遺跡（登呂遺跡、一乗谷朝倉氏遺跡、西都原古墳群）の担当者から、整備事業のこれまでと現状を発表いただきました。後半には、遺跡整備とは異なる分野の3名の方から博物館、都市公園、動植物園（江戸東京たてもの園、東京都美術館、東山動植物園）の再生について発表いただき、各分野でも遺跡整備と共通の課題を抱えながら再生事業に取り組んでいることを確認しました。その後の総合討議では、基本方針等の見直し、事業効果の把握・評価、社会的ニーズの変化への対応、施設の老朽化・展示の陳腐化に対する対策、運営体制における協働・連携の重要性等について議論しました。

参加者からは、「市民に求められているものは遺跡も同じで、先行して取り組んでいる異分野の事例や考え方は参考になった」との感想をいただきました。これからも遺跡整備特有の問題に取り組みつつ、広い視野で調査研究を続けていきたいと思います。

（文化遺産部　高橋 知奈津）

総合討議の様子